

2021年10月30日

池袋聖公会伝道所 礼拝堂聖別解除 感謝礼拝 説教

インマヌエル新生教会牧師・池袋聖公会伝道所管理司祭
司祭 ステパノ 卓 志雄

わたしたちは本日「池袋聖公会伝道所」を通して今まで与えられた神のみ恵みに感謝を献げるために集まって祈りを献げています。

昨年10月25日に行われました臨時堅信受領者総会では「池袋聖公会伝道所を売却し、神と信徒から与えられた賜物を力強い宣教と安定的な礼拝を行うために用いること」が信徒の皆さんによって決議され、池袋聖公会伝道所は来たる11月29日に引き渡されることになりました。

【なぜ最後の礼拝になったのか】

まずなぜ最後の礼拝を献げるようになったかについてお話いたします。池袋聖公会、東京聖マルチン教会、練馬聖ガブリエル教会、これらの3教会は共に礼拝をささげ、共に宣教活動を行い、共に話し合いながら一つになることについて検討してきました。その結果、2018年開かれた東京教区第133(定期)教区会の決議によって、新教会設立が決まり、2019年1月1日付で、池袋聖公会、東京聖マルチン教会および練馬聖ガブリエル教会の3教会は一つなり、2019年3月21日第134(定期)教区会でインマヌエル新生教会という教会名称が可決承認され新たな歩みをスタートしました。

その後2020年度臨時堅信受領者総会にて「インマヌエル新生教会の礼拝堂及び牧師館取壊及び新築」の件が可決承認され、教会建築が進められ来週11月6日インマヌエル新生教会礼拝堂聖別式を迎えることになりました。教会建築に関してはコロナ禍の状況にありながらも全く問題なく神の導きと皆さんのお支えによって行われてきましたが、建築後における教会の働き-安定的な礼拝と力強い宣教-のための財政の安定は必要不可欠な事案だと思いました。そのために検討してきたのは、池袋聖公会伝道所の売却でした。その検討のために「信徒懇談会」数回開催して信徒同士の意見を分かち合いました。

教会委員会からは今後の建築資金計画および教会の礼拝・宣教・交わりのために池袋聖公会伝道所の売却を検討しているという説明を行いました。それに対して池袋聖公会伝道所の建物維持のための費用、売却のメリットとデメリット、池袋聖公会伝道所の建物に対する思い、インマヌエル新生教会のこれからの宣教などについて様々な意見がありました。そして池袋聖公会を長く支えて来られた信徒の方々からの発言がありました。

『信徒の高齢化や減少は、今後ますます深刻な事態を迎えます。旧池聖建築時の高度成長期やバブル期とは違い、人々の生活には全く余裕がなく、外部からの献金も多くは期待できず、資金は内部で集めるほかにないのです。もはや池袋の建物の補修に力を割く余裕が全くありません。しかしわたしたちには合併以前の3つの教会がそれぞれ持っている様々な賜物（心、祈り、伝統、財産など）があります。今こそ、その賜物を新しい教会のために活かしていくことが求められています。（後略）』

『（前略）新しい礼拝堂を建築し、さらに池袋の建物の補修まで献金をする力が私たちに残っているでしょうか。私も心の中では池聖の建物を残しておきたいという気持ちはあります。しかしそれでも後輩たちにツケを残すことはできない、池袋伝道所を売却しても次の世代にツケを残さないようにすべきだと思っています。建物を維持することが宣教ではなく、建物という先達からの賜物を用いて教会の働きを生かしていくことが宣教です。』

信徒懇談会後、当日行われた第 14 回（定期）教会委員会にて「池袋聖公会伝道所の土地と建物売却」のための臨時堅信受領者総会を開催することが決定し 2020 年 10 月 25 日臨時堅信受領者総会にて「池袋聖公会伝道所の土地と建物売却」承認の件が可決承認されました。そして第 137（定期）教区会で「池袋聖公会伝道所教会建物および土地売却処分の件」が可決承認されました。今日の礼拝が終わりましたら明日には池袋聖公会伝道所における最後の主日聖餐式が行われ、教会の備品、聖具などを新礼拝堂に運び、11 月 29 日に引き渡されます。これからはこの建物は楽器のショールームになって美しい旋律を通して人々の心の癒しを与えられる場所となります。

【わたしたちはこの礼拝を通して何を感謝するのか】

わたしたちは今日祈りを献げています。この礼拝堂を通して主から与えられたみ恵に感謝をささげたいと思います。またこの礼拝堂を通して主から与えられた豊かな出会いに感謝をささげたいと思います。またこれから新しい姿で礼拝をささげ、宣教を行います。わたしたちの全ての営みを主が導いてくださいますように力強く祈りをささげたいと思います。

池袋聖公会は、1925 年関東大震災直後の失意の内にある池袋の町に希望の光となるべく、CMS 系の神学院教授たちによって、医師諏訪幹雄兄を柱として「池袋会館」として建てられました。諏訪幹雄兄は薬剤師松林清次兄と車の両輪のように初代牧師村尾昇一師（後に主教）を助け、医療と伝道の拠点として活動を始めました。診療は献金制度として行われ、この献身的な奉仕が伝道となりここに集う人々は次第に増えていきました。その後、先の大戦によって教会が消失という苦難の時代を迎えましたが、離散した信徒を一人ひとり訪ね歩いた信徒の力に支えられ、1950 年に教会再建、さらにその 3 年後、現在の地に礼拝堂を新築するに至りました。

現在の礼拝堂は 1991 年に新築され 30 年間この場所で神様によって与えられた祈りの仲間たちと共に聖卓を囲み、共に食卓を囲み話し合いながら宣教を行ってきました。全てが神様のみ恵みです。

今日のこの礼拝を通して改めて感謝を献げたいと思います。今までわたしたちの営みを導いてくださった神様と信仰の先達の皆様に感謝を申し上げたいと思います。この礼拝堂を支えて下さった信徒の一人ひとりに感謝を申し上げたいと思います。またこの礼拝堂で働かれた聖職の方々も覚えます。今日の聖書箇所は教会の小祝日の中の「主教」を記念する日に用いられます。主教を始めとする聖職者を覚える聖書箇所には羊飼いが登場します。聖書のみ言葉を通してイエス様から与えられた権限をもって、神と神の民に仕える聖職のあるべき姿を聖書は語っています。

まず神の羊飼いと、イエス様のように良い羊飼いと、この礼拝堂を導いてくださった歴代聖職の方々に感謝を申し上げたいと思います。ご存命の方々には直接、逝去された方々に対しては後程代禱を通してその働きを覚えたいと思います。

【これからのわたしたちの働きとは】

そしてわたしたちの新たな宣教の姿も確認したいと思います。先ほど申し上げた理由によって長い間、慣れ親しんだ、思い出いっぱいの場所からわたしたちは完全に離れることとなります。淋しい。悲しい。懐かしい……。しかし忘れてはならないことがあります。わたしたちのいまは、主の福音を宣べ伝えるために相応しい器となっていくプロセスであることを忘れてはいけません。

そして「池伝」という名前は消えるかもしれないが、「池伝」を育ててきたわたしたちの賜物、主から与えられた賜物を用いて新しい共同体を作り上げていく「復活」を共に分かち合いたいと思います。今までわたしたちが歩んできた足跡は大きな宣教の力です。この宣教の力を用いて新たな姿で宣教を行う際、心に留めるべきことを今日の

福音書は語っています。

聖職だけではなく、教会の全ての人々がイエス様のように「良い羊飼いに」なって、教会の働きを守っていくことをイエス様は求めておられます。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」これは当時ユダヤ人の教会だけではなく、ギリシャ人を始めとするすべての異邦人に対する積極的な関心と宣教の可能性を示していると言われています。「神様は誰も見捨てない、異邦人さえも神様の導きから除外されない」ということをイエス様は語っておられます。特に原語の「聞き分ける」、「群れになる」は未来形であります。これは神様のご意志を誰も邪魔できないという約束と確実性を語っている証拠でしょう。またわたしたちの現実から考えてみましょう。多分神様の語っておられる囲いと、わたしたち人間、特に今の教会が考えている囲いとは違うと思います。伝統的に羊飼いと羊、また羊が住んでいる囲いとは、イエス様とキリスト者、また教会というふうには解釈されてきました。しかし今日の福音書はそれ以上の可能性を示唆しています。「わたしたちの教会はわたしたちの物ではなく、これから教会に来られる人々からしばらくお借りしている物だ」と言われます。また神様の「囲い」はわたしたちが考えている「囲い」を乗り越えます。神様は誰一人もあきらめないで、無限なる「愛」をもって救ってくださいます。わたしたちはその器になります。わたしたちは教会の内だけではなく、教会の周り、いわゆる世の中に対しての責任もゆだねられています。ここにインマヌエル新生教会の宣教の課題があります。

【Every end is a new beginning】

昔イスラエルでは物理的に目に見えるところで神に出会い、神に礼拝を献げました。「いけにえを献げる祭壇」「幕屋」「神殿」で神の現存を感じました。

ヨハネ 1：14 には「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」という救いの確信たるメッセージが書き記されています。言は永遠に生きておられる「存在それ自体」としての神様を意味しています。「宿る」という言葉はギリシャ語で「テントを張る」という意味があります。

旧約聖書におけるテントと言えば「幕屋」です。神様が「臨在する」所を幕屋と言いますが、幕屋というのはモーセがシナイ山で十戒をいただいた後、神様の命令に従って作った礼拝を行う組み立て式のテントで移動できるものでした。イスラエル民族が荒れ野の旅をする時には、解体したり組み立てたりして携帯し、神様の臨在を体験する礼拝の場所として使いました。その後、エルサレムに神殿ができてからは神殿に入って礼拝をささげながら神様の臨在を体験しました。しかし、異邦人の侵略によって神殿は何回も壊され、目に見える形の神殿は存在しなくなりました。イスラエルの人々は神が現れる場所、神に出会う場所を失いました。

しかし 2 千年前、イエス様がわたしたちのために、わたしたちの間に宿られ、わたしたちは幕屋に行かなくても、神殿に行かなくても、神様の臨在を体験することが出来るようになりました。

目に見える大事なもの、すなわち池袋聖公会伝道所の礼拝堂と別れることとなります。慣れ親しんだ、思い出いっぱい場所との別れは悲しいです。切なくなります。このようなわたしたちにコリントの信徒への手紙Ⅱ 4 章 18 節のみ言葉は語っています。『私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからです。』

目に見えるものはなくなっても目に見えないもの、ことに池袋聖公会伝道所を通して育まれた信仰と賜物はなくなってしまうわけではありません。インマヌエル新生教会を通してより豊かなものになります。わたしたちが心配していることやわたしたちの乏しいところは主なる神様が補ってくださることを信じます。わたしたちは多くいても一つの体として主の食卓を囲んでいますので、主によって養われています。また養われたわたしたちは共に歩みます。主の愛と恵みを必要とする人々とその愛と恵みを分かち合いながら共に歩いていくのです。